ふしぎな如意輪観音様（東野上）

東野上の常正寺という寺に、自分の思うままに動くことのできるふしぎな力を持つと言われている観音様がまつられていました。

何かお願い事がある時、観音様の名前をとなえてお願いすると、それを聞きつけてかなえてくださると、村人たちはみな信じておりました。

二つの勢力が別の天皇を立て、南と北に分かれて対立していた時のことです。戦は都から日本中に広がり、この寺も戦に巻きこまれてしまい、火がかけられました。寺は瞬く間に炎に包まれてしまったのです。

寺を大切に思ってきた村人たちは、気が気ではありません。戦がおさまるとすぐに寺に駆けつけました。

「おそろしかったなあ。」

「寺が燃えてしもうた。」

「観音様はどうなったのだろう。」

「きっと燃えてしまわれたに違いない。」

「あんなに早く火の手が回っていたからなあ……。」

悲しい思いで話し合っていると、誰かが焼け跡から呼んでいるような声がしました。

「何か声がする」

「何かあったんだろうか。」

ふしぎに思いつつ、声のする方に行ってみました。その声は確かに井戸の方から聞こえてきます。のぞいてみると、井戸の中の奥底深く、なにやらぼうっと光っているものがありました。よくよく目をこらしてみると、それはあの観音様だったのです。

「ややっ。こんなところに観音様がおられる。」

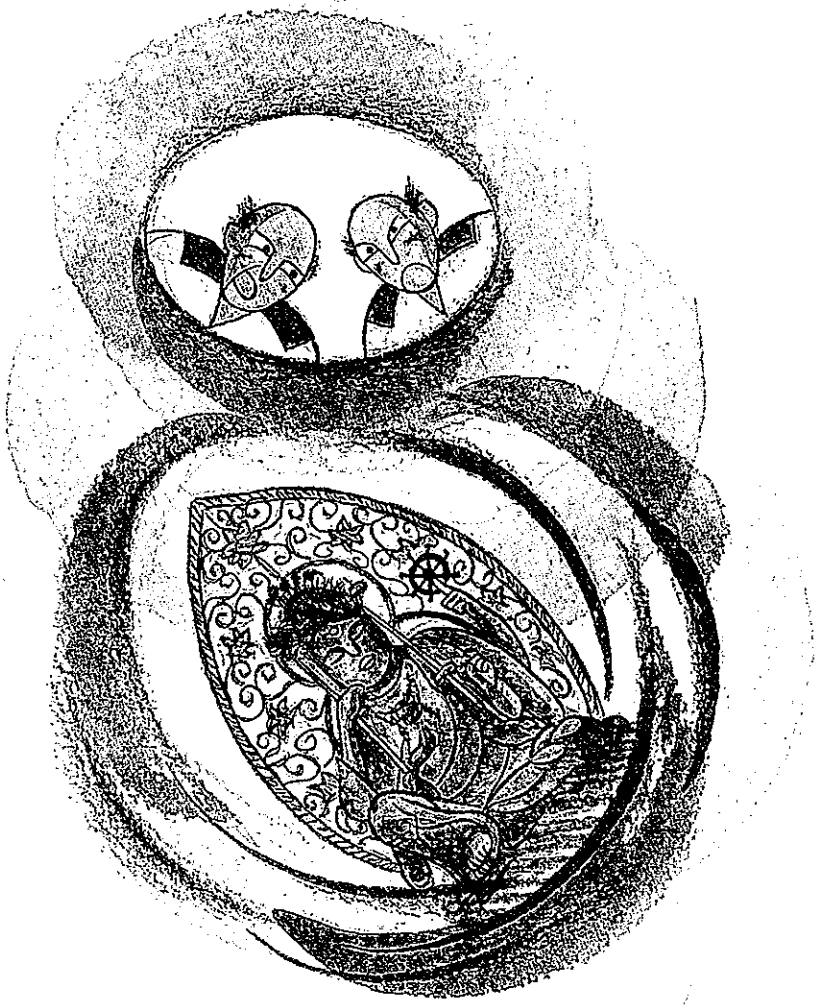
「火から逃れてこられたのだろうか。」

「なぜこんなところに……。」

寺の者たちに聞いてみても、戦に巻き込まれて観音様をお助けするどころではなかったということでした。誰が運んできたのでもないらしいのです。村人たちは大変驚きました。

「この観音様は、自分で動きなさるんじゃ！」

「何かの時には、自ら動かれるとは聞いていたが……。ふしぎな力を持っておられるに違いない。」

「わしらが無事だったのも、きっと観音様のおかげに違

いない。ありがたい。ありがたい。」
「そうじゃ、ありがたいことじゃ。」
村人たちは、あらためて観音様のふしぎな力に感心したのです。
「一日も早く観音様をおまつりできるところをご用意しなくては……。」
「お寺の再建はすぐにはかなわないが、せめて小さなお堂でも建てて、観音様にお移りいただこう。」
村人たちは力をあわせてお堂を建てて、観音様に入っていただきました。そして、ますますこの観音様を大切にするようになり、朝な夕なにお参りをしたということです。
この観音様は、人に見られないように願い事をすると聞いてくださると言われていました。厄除け、安産、長生きなどに御利益があると言います。
それから長い時が経ち、お堂も傷みました。このままでは観音様に申し訳ないので、青龍寺のご住職にお願いして観音様をお守りしていただくことにしました。
今では青龍寺にじっと居られて、みんなの暮らしを見守っておられるのです。